

# 全国青少年体験活動推進フォーラム

～「誰一人取り残さない」体験活動の取組～

報告書

テーマ  
すべての青少年の手に届く体験活動を！



## 事業の概要

- 【開催日時】 令和4年11月19日（土）9:45～15:30
- 【会場】 国立妙高青少年自然の家（一部オンライン配信）
- 【主催】 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立妙高青少年自然の家
- 【後援】 新潟県教育委員会、妙高市教育委員会、上越市教育委員会、糸魚川市教育委員会、新潟県社会福祉協議会、妙高市社会福祉協議会、上越市社会福祉協議会、糸魚川市社会福祉協議会
- 【趣旨】 青少年の健全な成長には、自然体験活動や社会体験活動等を含め、多様な体験活動の機会を拡充していくことが必要である。しかしながら経済格差やひとり親世帯等の困難を抱える青少年の体験活動を十分に提供できていない現状がある。この状況の中で、誰一人取り残さない体験活動の取組や、個別最適な学びにつながる体験活動の重要性について再認識をするとともに、様々な実践事例について検討し、成果や課題等について全国に普及啓発する機会とする。
- 【対象】 青少年教育指導者、教員、学生、教育行政関係者、幼稚園教諭・保育士、体験活動に興味がある方、体験活動の指導者を目指す方 等
- 【参加者】 107名
- 【企画委員会】 委員長 明石 要一 氏（千葉敬愛短期大学学長）  
委員 坂本 昭裕 氏（筑波大学教授）  
中野 充 氏（新潟青陵大学准教授）  
伊野 亘 氏（上越市立高田西小学校介護員、元国立青少年教育振興機構理事）  
小林 朋広 氏（国立妙高青少年自然の家所長） \*事務局：国立妙高青少年自然の家

## 日程と内容

- 10:15～10:25 **開会式** 開会のあいさつ（国立妙高青少年自然の家所長）
- 10:30～12:00 **鼎談「困難な課題を抱えた青少年の体験活動」の推進**（Web同時配信）  
講師：明石 要一 氏、坂本 昭裕 氏、伊野 亘 氏、中野 充 氏
- 13:30～14:30 **分科会**「課題等を抱える青少年の体験活動の実践」  
第1分科会「発達障害や不登校傾向等の課題を抱える青少年の体験活動」  
第2分科会「特別支援学校における体験活動」  
第3分科会「経済的に困難な状況にある青少年の体験活動」
- 14:45～15:15 **全体会**「まとめ」  
① 分科会コーディネーターよりまとめ 坂本 昭裕 氏、伊野 亘 氏、中野 充 氏  
② 企画委員長よりまとめ 明石 要一 氏
- 15:15～15:30 **閉会式** 閉会のあいさつ（国立妙高青少年自然の家所長）

## 第2部 | 分科会

### 課題等を抱える青少年の体験活動の実践

#### 第1分科会

#### 発達障害や不登校傾向等の課題を抱える青少年の体験活動

コーディネーター 坂本 昭裕 氏（筑波大学教授）

実践発表（分科会 発表のポイント）

#### 「チャレンジキャンプの実践から」

村松 研一 氏（国立妙高青少年自然の家企画指導専門職）

- キャンプ中に得た「感動体験」は、時間の経過とともに子供たちにとって心の支えとなり、その後生きてくる。
- 誰もが安心して活動できる環境づくり、グループを主体としたプログラム構成、スタッフとの信頼関係づくりが、子供たちの成長を促す要因として重要である。
- 課題を抱える子供は、他者との比較や日常的な指摘により、自己肯定意識の高まりが弱い。キャンプ後も自己概念が保たれるようなフォローアップが重要である。

#### 第2分科会

#### 特別支援学校における体験活動

コーディネーター 伊野 亘 氏

（上越市立高田西小学校介護員、元国立青少年教育振興機構理事）

実践発表（分科会 発表のポイント）

#### 「自然の家を利用した体験活動による生きる力の育成」

福田 功 氏（新潟県立高田特別支援学校校長）

#### 「個の特性に応じた宿泊体験学習

#### ～社会自立を目指した継続的な取組～

村山 哲 氏（妙高市立総合支援学校教頭）

- 宿泊体験を通して児童生徒のできることを、できないことを知ることが、自立に向けた基礎的な力を育む上で貴重な学びとなる。
- 継続した取り組みを続けることにより、公共の施設、普段と違った生活環境に慣れることにつながる。また、その年の児童生徒の実態に合わせた成功体験を積み重ねることが大切。
- 児童生徒の変容に期待できることについては、宿泊体験を行うことで「自立活動」の内容の全ての区分に当てはまるのではないかと

#### 第3分科会

#### 経済的に困難な状況にある青少年の体験活動

コーディネーター 中野 充 氏（新潟青陵大学准教授）

実践発表（分科会 発表のポイント）

#### 「『わんぱく自然体験』事業の取組

#### ～ひとり親家庭への自然体験活動～

村山 郁枝 氏（一般社団法人新潟市母子福祉連合会）

#### 「児童養護施設への自然体験活動の提供

#### ～社会課題解決への挑戦～

佐藤 瑞希 氏（新潟青陵大学ボランティアセンター）

- 新潟市母子福祉連合会は、わんぱく自然体験事業を実施しており、今年度妙高や五頭山麓、長岡を会場として多くの体験

活動を提供することができた。自然体験活動は、親子の絆を深め、子供の成長につながる貴重な機会であると捉えている。  
○新潟青陵大学ボランティアセンターでは児童養護施設との連携事業を8年間継続している。参加する子供たちの成長はもちろん、企画・運営することで学生の学びにつながっている。  
○青少年に多様な体験活動を提供していくことが大切で、関係機関との連携や助成金の活用など、人や物につながる仕掛けを持続的にしていくことが大切である。

## 第3部 | 全体会 分科会のまとめ・報告

第1分科会 コーディネーター 坂本 昭裕 氏

チャレンジキャンプではきれいな景色、達成感、野外炊事等の体験など、数々の感動が見られた。キャンプで何か成果を得ようとする時には、キャンプの自然の中で、偶然の出来事が生じる余裕をつくるのが大切である。さらにキャンプの効果は、キャンプに送り出した保護者にも効果がある。親自身が考えるきっかけとなったという意見を聞くことがある。また、課題をもつ子供の肯定的な変化が見られた。誰ひとり取り残さないことを体験活動を通して取り組む妙高の実践がよく伝わった分科会であった。

第2分科会 コーディネーター 伊野 亘 氏

妙高青少年自然の家を利用した体験活動の有効性が確認された。人間関係の形成、マナーや自立心が芽生え、コミュニケーション・自己表現ができるようになった。回数を重ねて、継続して利用しているので、子供たちの変容が見られた。3人で課題に挑戦するオリエンテーリング、オリオン棟内のテント張りも、子供を成長させた。生活単元学習に上手く位置付け、取り組んでいる。指導者は、いろいろな専門家や保護者と連携をとっていく必要がある。施設職員は、先生方の事前事後の学習の資料があったら、提供してほしい。

第3分科会 コーディネーター 中野 充 氏

自然の家で子どもゆめ基金を使って取り組むことも必要である。交通費や宿泊費等を支援してもらおう。子供たちにとって様々な自然体験に取り組める事業となる。体験活動をさせるには経済的にも体力的にも難しい親御さんもいる。様々な助成金について学生たちが学ぶことも必要だ。新潟県の養護施設が、学生と連携し子供たちを成長させることができる。連携することが必要である。

### 全体のまとめ 企画委員会委員長 明石 要一 氏

第1分科会は、チャレンジキャンプを2年連続で行い、データ分析し、2年目の改善につなげた。

第2分科会では、小中高等部で、卒業まで体験活動を8回行い、段階的に成長させた。

第3分科会では、財政的な支援が大切であることがわかった。スタッフの確保と育成が大切だ。第3の顔があることを保護者に示してあげる。

3分科会とも貴重な提案だった。



発行 令和5年2月

独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立妙高青少年自然の家  
〒949-2235 新潟県妙高市大字関山6323-2  
TEL 0255-82-4321 FAX 0255-82-4325

## 「困難な課題を抱えた青少年の体験活動」の推進

【講師】 明石 要一 氏 (千葉敬愛短期大学学長) \*進行・問いかけをゴシック体で表記します。  
坂本 昭裕 氏 (筑波大学教授)  
伊野 亘 氏 (上越市立高田西小学校介護員、元国立青少年教育振興機構理事)  
中野 充 氏 (新潟青陵大学准教授)

**明石:** まず、コロナ禍の3年間で、子供たちはどう変わってきたかお聞きします。

**伊野:** 全国28国立青少年教育施設で、コロナ禍前の年間約500万人の利用が約100万人に減少しました。また、宿泊体験をした学校の先生95名にアンケートをとったところ、体力が落ちたと答えた方が78%で、子供の体調不良や怪我増加の指摘もありました。生活習慣の乱れの指摘が約半数、意欲低下の回答が約3割、人間関係希薄化の回答が25%でした。さらに、体験をした子供400人のアンケートでは、ストレスを感じている回答が2割、やる気の面で困難を感じている回答が3割もありました。



**中野:** 新潟青陵大学では、妙高青少年自然の家で約300人が合宿していましたが、コロナ禍で開催できなくなりました。オンライン授業、対面とオンラインのハイブリッド式の実施で、授業は止めませんでしたが、学園祭も課外活動も十分できていません。ボランティアセンターも同様で、自主事業は不十分で、海岸ごみ拾い等密にならない活動を行う程度です。

**坂本:** 筑波大学でも、対面の授業は十分できませんでした。感じていることは、学生たちは3年間変わらなかったということです。本当は変われなかったのだと思います。変わったことは、知識が若干増えたことでしょうか。しかし、体験活動や実践活動を通して身に付く知恵が身に付かなかったと思います。それ相応の育ちが得られなかったと思います。

**明石:** 子供自身は昔と変わっていませんが、体験の仕方が変化しています。遊びの変化について、だるまさんが転んだができない児童が増えたというデータがあります。遊びは変わったのでしょうか。

**伊野:** 前と今の遊びの変化ですが、横のつながりはありますが、コロナ禍で縦割りの遊びや活動ができません。6年生の育ちや先輩後輩の育ちが不十分です。

**中野:** 全く小学生と同じで縦割り活動ができていません。オンライン・ズームに切り替えることが多く、縦のつながりやリーダー育成ができない現状があります。ボランティアセンターも同様です。

**坂本:** コロナに限ったことではないですが、自分の子供時代を思い返すと、よくいちかばちかやってみようという体験をしました。自分の進退をかけるような冒険、挑戦する遊びを子供の頃にしていました。川を越える、洞窟に入る等、どきどきしました。そんな遊び、特に五感を使う遊びが減ったということです。

**明石:** 中教審答申で個別最適な学び、協働的な学びが提唱されました。社会教育では、個別最適な遊び、協働的な遊びを提案したいです。自分一人で遊びたいという子も増えています。どんな個別最適な遊びと協働的な遊びが考えられるかを教えてください。

**伊野:** 以前妙高青少年自然の家で勤務した時に、ときわ保育園さんから、園の方針で自然体験を取り入れたいというお話をいただきました。私は、大田切川の体験活動を考え、パケツ等いろいろな道具を用意しましたが、実際に川に入ると園児は道具を使わず一人一人が遊び始めました。熱中し飽きることなく遊び、その後友達に遊びを伝え合う姿が見られました。みんなで石をひっくり返したり、大きな石を滑り台にして滑ったり、水生昆虫を見つけて探し始めたりしました。遊びが広がったのです。雪の時期もそうでした。ある子がV字谷で、雪の滑り台を見つけました。これが仲間と共に行う電車ごっこ滑り台に発展していきました。周囲の子供たちを引き込んで学びと遊びが拡大していった自然遊びでした。

**中野:** 個別最適な学びという視点で、コロナ禍でデジタルトランスフォーメーションが重視されています。以前、ボーイスカウトのオンラインでバッジをもらう実践をしました。個別最適な遊びは難しいと思っていましたが、我々大人には環境づくりができます。植物が水がなくて根を張るのと同様に、按配を考え肥料(エッセンス)を与えるのが大人です。与えすぎはいけません。自分で考えなくなるからです。按配は指導者の経験が左右します。個別最適ではないですが自然の中のチャレンジが必要です。

**明石:** 日本の自然体験は、協働的な遊びが中心です。しかし、個別最適な遊びも必要です。2歳くらいまで個別な遊びに没頭して年中くらいから、みんなで遊ぶ指導者の指示が多くなります。みんなで遊ぶのもいいですが、一人でもキャンプは楽しいというお子さんを容認する姿勢が必要ではないでしょうか。

**坂本:** おっしゃるとおりです。自由で子供たちが妄想し、創造性を養える一人遊びも必要です。一方、協働的な遊び、全員が協力しないとできないものも必要です。妙高の施設に妙高アドベンチャーがあります。筑波大学にも同様な施設がありますが、さあやってみようという、壁の前で話し合いだけをしていることがあります。まずやってみることが大切だと思うのですが・・・黙って見ているところがストレスになります。

**明石:** 困難な課題を抱えた子供を対象とした体験プログラムをつくる際にどんな視点が必要ですか。

**中野:** ネット・ゲーム依存が増えていきます。私は登山の時、必ずスマートフォンを持ってくるように伝えています。どこにいるか分かります。不便を楽しみ、どう快適にしているか、知恵をもつことが大切です。磐梯青少年交流の家の長期キャンプに協力しています。肥満対策もしていて、1日1回はコ

メを炊きましょうとお願いしています。「料理が上手になった。」等、肯定的な評価が見られます。「快適な世の中にするには。」「どうしたらおいしく食べれるか。」などのエッセンスとして入れていくかが大切です。

**明石:** 国立中央青少年交流の家や機構では、引きこもりの青少年を元気づけたり、ゲーム依存などの課題を抱える子に対する取組を行ったりしましたが。

**伊野:** 機構主催で引きこもりの方を対象としたキャンプ、久里浜の医療機関と連携したネット依存のキャンプをしました。「人は人によって人になる」ということが分かりました。効果があったのはメンターと一緒に体験活動を行い、関わりをもったことです。信頼関係ができました。過去に参加した方が大学生のメンターになり、人との関わりによって子供たちは変わっていくと感じ取りました。

**明石:** 困難な課題を抱えた青少年の体験活動では、一つの単体では無理が生じます。知恵はありますか。

**伊野:** 妙高青少年自然の家の長期キャンプでは、筑波大学の専門のスーパーバイザーとして坂本先生に入ってください、学ばせてもらいました。カウンセリングや医療の力、福祉の力など、大きなネットワークの力を借りて取り組むことが大切です。

**明石:** 困難な課題を抱える子供に対する体験活動を行う際に、注意していることを教えてください。

**坂本:** 長期キャンプで大切なのは、一つ目は自然という枠組みで、二つ目は人と毎日同じことをすることです。歩かざるを得ない状況や、偶然がおきる余裕をつくります。偶然性は、子供を変える契機となります。こだわり等の同一性を崩すことがあります。



**明石:** 最近の体験活動の勝負は感動だと思います。快感はあるけれど、感動がない場合もあります。感動と快感の違いを先生方はどうとらえますか。

**中野:** 体験を意図的計画的にしてあげることは必要です。新潟市の角田山登山の募集を掛けると、結構集まってきます。小さいことだけれど種をまくことが大切です。

**明石:** 感動体験は教えられるのでしょうか。

**伊野:** 感動という文字で示しても伝わりません。体験を通して感じるものです。体験活動を多く取り入れ、誰一人取り残さないという視点で、妙高市の4泊5日のフレンドスクールがありました。人と関わらざるを得ない環境をつくります。最初ホームシックになりますが、最終日にダンス発表し、感動し涙を流す子もいました。不登校が少ないという結果も出て、一人一人の子供の成長につながっています。

**明石:** 五感は教えられるもの、提供するものでしょうか。五感を伸ばすのが体験活動の目標だと思います。

**坂本:** 最近eスポーツがありますが、これは五感を育むのでしょうか。私は、eスポーツはスポーツと言えないと思いますし、単に脳内を活性化させ認知機能を高めていくだけです。これでは、五感は育まれないと思います。子供を放っておくと、

その方向にいつてしまいます。大人が何か歯止めというか、ルールをつくる必要があります。

**明石:** もっと五感でプログラムを検討してほしいです。

**坂本:** 自分がどうしたら感動するかなと思ったら、本物に出会うことだと思います。

**明石:** Well-beingを保障する体験活動についてお聞きします。どうすれば幸せになるのでしょうか。

**中野:** 学習者のWell-beingを保障することですね。人を幸せにするのは人の役に立つことだと思います。

**明石:** 学校の先生方は今よりも将来のことを考えて、今の幸せを大切にしていないような気がします。

**伊野:** 子供は今の自分に一生懸命です。過去に出会ったお子さんと、一人遊びしかできなかった子がいました。でも鬼ごっここの楽しさを知ったら、一人遊びから仲間との遊びができるようになりました。

**明石:** 学校教育は将来を大切に、社会教育は今を大切に。なぜ、今を大切にしないのでしょうか。

**坂本:** ハピネスは、一人で成し得ないものです。A Iさんの歌ハピネスの詞に「君が笑えば、世界が幸せになれる。自分を受け止めてくれる人がいれば幸せになれる。」があります。キャンプでは、振り返りがありますが、話したことを受け止めてもらう体験が必要だと思います。

**明石:** Well-beingに対し慶應大学の先生は「やってみよう、ありがとう、なんとかなるさ、今のあなたがいいですよ。」の4つが必要だと指摘されました。次は、体験活動に正解はあるかないかを教えてください。

**中野:** どちらかと言えば、ないと答えます。自分の頭で、どうやったらよくなるかを考え、課題を解決し、最適な答えを見つけ出します。目先の結果だけでなく、夢を設定し10年先を見通すことも必要です。

**伊野:** 正解はないと思います。かつて担当した長期キャンプでは、塩の道を歩く体験を行いました。歴史を感じてもらいたいと思ったのですが、毎日問題が起きました。大げんかもありましたが、最後に、参加した子供たちから「塩の道は人の心をつなげる道だ」と感想があり、やってよかったと思いました。

**坂本:** 正解は子供の成長だと思うので、正解はないと答えます。かつて恩師の先生から、「子供の体験していることを理論に当てはめて、考察してそれをおしなべて正解とするとは何事だ」と言われた経験があります。

**明石:** すばらしい先生ですね。体験活動でどんな力が身に付く、また身に付けてほしいと思いますか。

**中野:** メタ認知、コミュニケーション能力、共感する力ではないでしょうか。手間をかけた自分たちでルールを作り、民主的に物事を決めようとしています。

**伊野:** 自己指導能力です。手間をかけて発達を支持していく体験活動は、自己理解の大きな材料となります。発達心理的な生徒指導になります。

**坂本:** どうしようではなく、どうにかしようとする力を身に付けること、そのためには、なるべく大人が教えないことが必要です。

**明石:** 上手くまとめていただきました。困難な課題をもつ子供に対し、どうにかしようという構えをもち、子供の課題やもっているものを引き出し、解決することが重要ですね。皆様ありがとうございました。